南方諸地域に於ける脚鬚目概説*

高　島　春　雄

東京文理科大學動物學教室

I　脚　鬚　目　鳥　瞰

脚鬚目中の代表者サソリモドキの類は多少サソリの俤ある嚴しい姿の持主で日本でも外國でも研究者は便宜上雙方を調べて居るが、それは全く便宜的處置であつて本目が全蠍目と最も近親關係を示すといふ證據にはならぬ。ムカデとヤスデは昔のやうに類緣關係密接なものでなくなつた今日でも、多足類といふ便利な稱呼の下に一括されて多足類學者は必ず兩方一緒にやつて居り、爬虫類と兩棲類とを研究對象とする動物學を Herpetology と稱したりするのと同じである。蜘形綱の詳しい分類様式では櫛狀器の有無が大きな分岐點になつて全蠍目のみを有櫛亞綱* Pectinifera, 脚鬚目を含む他の8目は無櫛亞綱 *Epectinata と引離される位である。脚鬚目のものは外形はサソリ程に規制されて居らぬ。少

* 東亞產全蠍類脚鬚類の調査（其の十七）
本稿は「南方諸地域の蠍概説」と姉妹篇を成すものである。

Acta Arachnol Vol. X. Nos, 1/2 (1947)

くも三つの著しく異る様式の仲間がある。目の分割に關しては色々であるが例へば Kästner (1932) に主として準據すれば次の如くである。其の後獨のSpeijer, 伯の Mello Leitão 等は多くの新屬を提唱し細分したが餘り分割する様式は予の性に合はない。Kästner の頃ので一通りの用は足りると信ずる。

Uropygi Thorell (1882) 有鞭亞目

Schizopeltidia Börner (1902) 裂甲族 〔=Tartarides Cambridge (1872) 短鞭族 =Colopyga Cook (1899)

Schizomidae Hansen et Sörensen (1905) ヤイトムシ科 約32種**

Schizomus Cook (1899) ヤイトムシ屬

Trithyreus Kraepelin (1899) サハダムシ屬

Stenochrus† Chamberlin (1922) ステノクルス屬※

Holopeltidia Börner (1902) 完甲族*〔Urotricha C. L. Koch (1850) 長鞭族 =Oxopoei Thorell (1888) Kästner (1932) は Oxypoei として用ひた〕

Thelyphonidae Lucas (1835) サソリモドキ科 約66種

Thelyphonus Latreille (1802) ジャワサソリモドキ屬*

Typopeltis Pocock (1894) サソリモドキ屬

Uroproctus Pocock (1894)

Labochirus Pocock (1894)

Hypoctonus Thorell (1888)

Mimoscorpius Pocock (1894)

Abaliella Strand (1928)

Tetrabalius Thorell (1888)

Thelyphonellus† Pocock (1894)

Mastigoproctus† Pocock (1894)

Amblypygi Thorell (1882) 無鞭亞目〔=Phalangia C. L. Koch (1850)〕

Tarantulidae Karsch (1879) ウデムシ科 約53種

Phrynichinae Simon (1892) フリニクス亞科

Phrynichus Karsch (1879)

Damon ↑ C. L. Koch (1850)

Tarantulinae Simon (1892) タランツラ亞科

Tarantula Fabricius (1793)

Acanthophrynus ↑ Kraepelin (1899)

Admetus ↑ C. L. Koch (1850)

Charontinae Simon (1892) カニムシモドキ亞科

Charon Karsch (1879) カニムシモドキ屬

Catageus Thorell (1889)

Phrynichosarax Gravely (1915)

Sarax Simon (1892)

Stygophrynus Kraepelin (1895)

Charinides Gravely (1911)

Charinus Simon (1892)

Paracharon ↑ Hansen (1921)

總計3科26屬約160種でサソリに較べると種數はずつと少く體微小で人の眼に觸れること極めて少い種類も多く、人生との交渉も殆ど全く無くて南方經營上などには全く齒牙にかける必要無き動物ばかりである。但し學問的には興味深い群團で多くの節足動物學者を惹きつける魅力を持つて居る。屬までの檢索表

※ 和名新稱
※※現在では40種になつて居る。
↑ 此の記號あるは南方諸地域に分布せざる屬。
※ サソリのStenochirus Karsch (1891) と混同する勿れ。

を次に示す。

A　背甲は長さ幅に勝り外縁は略々平行して居る。腹部末端の3節は圓筒狀となり先端に尾狀附屬物を附隨せしめる……………………………有鞭亜目

B　背甲は2乃至5枚に分岐し尾狀附屬物は短く1～4節。體矮小で1糎以内……………………………………………………裂甲族　ヤイトムシ科

C　背甲は4裂（後背板は二岐しない）。♀の尾狀附屬物は4節…………………………………………………………………ヤイトムシ屬

CC　背甲は5裂（後背板は二岐する）。♀の尾狀附屬物は3節…………………………………………………………………………サハダムシ屬

CCC　背甲は2裂。即ち後背板は二岐せず且つ前後兩背板の中間に位する2小片を缺如。♀の尾狀附屬物は3節 …………………… ステノクルス屬

BB　背甲は1枚で分岐せず尾狀附屬物は長くて多數節より成る。體矮小ならず……………………………………………完甲族　サソリモドキ科

C　中眼と側眼間の畝は殆ど常に缺如し絕對に顯著でない。♂の脛節突起は南方諸地域產の諸屬では強く變形される。

D　第3尾節（後腹部の最後の節）に圓窓斑を缺く。♂の脛節突起は華奢であるが♀のそれと目覺ましく異る點は見られない ……………………………………………………………………テリフォネリス屬※

DD　第3尾節に圓窓斑を常に各側に有する。♂の脛節突起は前屬よりも強く變形される。

E　脛節距は第4步脚にのみ見られる。♂の脛節突起は強く變形して居る………………………………………………… ラボキルス屬

EE　脛節距は第3，第4兩步脚に見られる。♂の脛節突起は屢々尙一層強く變形される…………………………………ヒポクトヌス屬※

CC　中眼と側眼間によく發達した畝が常に存する。♂の脛節突起は屢々變

形しない。

D　♂の脛節突起は強く變形する。♀の鞭狀脚（第1步脚）跗節の變形はそれが見られる場合には第8, 第9兩節の一方或は双方が冒される…………………………………………………………サソリモドキ屬

DD　♂の脛節突起は強く變形されない。♀の鞭狀脚跗節の變形はそれが見られる場合には第7節が、其の節の片側若しくは兩側の1節或はそれ以上の節と共に（或はさること無くして）冒される

E　♂の性扉（第2腹板）は正中に溝なく、次の腹板後縁には中央に結節を見ない

F　掌は扁平で幅は纖細なる腿節のそれの2倍に達する。指は分節せず先端の方に強く曲る……………………ミモスコルピウス屬

掌は尋常

G　♂の脛節突起は♀のそれに似て居る。觸鬚基節の內側に齒は無い……………………………………マスティゴプロクツス屬※

GG　♂の脛節突起は♀のそれよりもずつと纖細。♂♀共觸鬚基節の內側に1齒を具へる………………ウロプロクツス屬

EE　♂の性扉は正中に明かなる溝を具へ、次の腹板後縁には中央に結節がある

F　第3尾節は常に各側に1箇の圓窓斑を具へる……………………………………………………………………ジャワサソリモドキ屬※

FF　第3尾節は各側に圓窓斑を具へないか或は2箇を具へる

G　第3尾節に圓窓斑を見ない…………モンナシサソリモドキ屬※

GG　第3尾節は各側に前後に並ぶ2箇の圓窓斑を具へる……………………………………………ヨツモンサソリモドキ屬※

AA　背甲は長さ幅に劣り外縁は弧狀に膨出。腹部末端は圓く尾狀附屬物を附

隨させない。第1歩脚の跗節は異様に細長で多數節より成る…………………………………………………………………………………無鞭亞目　ウデムシ科

B　前胸板は下端に於て膨大し幅廣き扁平板となる。中胸板も後胸板も幅廣い。歩脚跗節に褥盤を缺く。第4歩脚の脛節は1節乃至2節…………………………………………………………………………………フリニクス亞科

C　第4歩脚の脛節は1節。成體に於ける掌（觸鬚の第5節）は基部に痕跡的の2背棘を有するか或は缺く……………………………フリニクス屬*

CC　第4歩脚の脛節は2節。掌に於ける2本の背棘は成體では强く發達して居る……………………………………………………ダモン屬*

BB　前胸板は下端僅かに膨れる程度。中胸板及び後胸板は小さく方形或は幅は長さに劣る

C　跗節末端に褥盤を缺く。第4歩脚の脛節は3節…………タランツラ亞科

D　觸鬚轉節は下面に後方に向く長い錐狀突起を持たない。觸鬚脛節の外緣は殆ど一直線を成す。上稜には7～15棘がある

E　額緣は1粍の長さの刺を密に裝ふ。掌は上稜にも下稜にも常に1長棘を裝ふのみ。觸鬚脛節の內上稜は基方に多數の長短交互になつた棘を具へる。觸鬚腿節の下稜の基棘から內方に向ふ1箇の2番目に强壯な棘がある……………………………アカントフリヌス屬*

EE　額緣は刺を缺く（凹凸無し）か或は½粍以內の短刺を裝ふのみ。掌は上緣に於て2長棘を持つ。觸鬚脛節の內上稜には7～9棘ある比較的長い棘の間には精々末端に微細の小顆粒がある位。觸鬚腿節の下稜の基節から內方に向ひ棘は一つも生ぜぬ…………………………………………………………………………タランツラ屬*

DD　觸鬚轉節は下面に長い、後方に眞直ぐの錐狀突起を具へる。老熟したもので觸鬚脛節外緣は弓形で內方に彎曲する。其の上稜は6

～7 棘を具へ其の上方から第3～5に當るものは非常な長さで目立つて居る……………………………………………… アドメツス屬※

CC 跗節末端には明かな褥盤がある。第4步脚の脛節は4節（稀に3節）……………………………………………………………… カニムシモドキ亞科

D 背甲緣邊は鋸齒狀。側眼は其の近くに位置する

E 腕の脛節に於ける最長棘は成體では5本の内の（幼者では3本の内の）中央の良く發達した背棘である。掌の基部の背棘は末端部のそれより長い……………………………………………… カタゲウ屬※

EE 腕の脛節の端から2番目の良く發達した背棘が老幼を問はず最長。掌の末端部の背棘は基部のそれより長い

F 跗節（前跗節を除き）は4節。後脛節は2～4節で3節が普通……………………………………………………………… フリニコサラクス屬※

FF 跗節（前跗節を除き）は5節。後脛節は4節……… サラクス屬※

DD 背甲緣邊は尋常。側眼はそれからずつと隔たつて位置する

E 腕の脛節の末端から二番目の背棘は最長。其の後方の1棘は其の又後方のよりも長い。掌の末端部の背棘は基部のより長く、副棘を伴はない

F 跗節（前跗節を除き）は4節。後方步脚の脛節は3節……………………………………………………………… カリニデス屬※

FF 跗節（前跗節を除き）は5節。後方步脚の脛節は4節…………………………………………………………… カリヌス屬※

EE 腕の脛節の末端から2番目の背棘は其の後方の1棘よりも長からず。屢々其の又後方の1棘と略々等長なことがあり、時に短いことさへある。掌の背側の長棘は常に數本の短い棘を伴ふ。1短棘が屢々其の長棘の基部で融合して居る

F　指は上の諸屬と共に分節する。腕の脛節の３本の背棘は他のどれよりもずつと長い ……………………… スティゴプリヌス屬※

FF　指は分節しない。腕の脛節の２本の背棘は他のどれよりもずつと長い…………………………………… カニムシモドキ屬

DDD　背甲縁邊は尋常。眼も眼丘も全く無い………… パラカロン屬※

脚鬚目の標徴　頭胸部は背甲で被はれて居るが、それが１枚になつたものと分岐して2～5枚になつたものとある。腹部は11～12節で最後の３節は萎縮して圓筒狀となり後腹部を形成する。其の先に更に長鞭狀の尾狀附屬物を具へるもの、ほんの短い尾狀附屬物で雌雄により其の形狀を異にするもの等がある。大腮は小形であるが觸鬚は强大で先端鉗となり、完甲族のものでは特に顯著でサソリのそれを偲ばせ、サソリモドキの稱を得て居る。第1歩脚は他の歩脚に比し著しく細長で跗節は多數の小節に岐れ鞭狀になつて居る。殊にカニムシモドキの仲間は奇怪にまで纖細になつて居る。之等は明かに觸角としての役を勤めるものである（脚鬚類の名の起り)。他の３對は歩脚らしい形狀で又實際歩行の役を勤める。サソリに見る如き毒腺は無く櫛狀器も具へない。サソリモドキ類では腹端に１種の肛門腺が開口し生時刺戟すると醋酸の强臭ある液をさつと分泌する。此の腺は防禦腺である。

Ⅱ　南方諸地域に見る代表的の種類

サソリモドキ屬　Typopeltis Pocock (1894)

屬　徵　觸鬚の脛節突起は♂では變形することが著しい。即ち前縁鋸齒狀になつた棘として尖出することなく、圓壔狀或は膝曲して居て動鉗枝の尖と稍々鋏狀に會合する。腹部の第1腹板は♂では內半にのみ中央條溝があり第2腹板は後緣に殆ど不分明の棘がある。第１歩脚跗節の關節は延長し♀に見られる變形も輕微な程度である。中眼は１箇の長い圓形隆起により隔離される。第2～第4

歩脚の脛節に距がある。

サソリモドキ Typopeltis stimpsonii (Wood, 1862)

色 彩　浸漬標品に於て背面黑色、歩脚及び尾狀附屬物は赤味を帶びる。腹面は赤黑色、歩脚の基節は際立つて栗茶色、觸鬚の基節も赤味が强い。

分 布　脚鬚目は熱帶亜熱帶地方に多い。本種も東洋區系種と看做すべきであるが稍々北上して居るので學者の注意を惹く。日本及び中華民國の產で國內では九州のみから知られる。內南洋には完甲族は發見されない。臺灣では紅頭嶼、南端の恒春半島(こゝでは極めて普通)、東海岸では臺東から花蓮港方面まで產する。琉球では西表島、鳩間島、石垣島、冲繩本島が既知、九州は離島の德之島、奄美大島、諏訪瀨島、平島、口之島、硫黄島、竹島を經て薩摩半島の南端枕崎、坊、泊附近に產し又上甑島(鹿兒島縣下)、熊本縣天草島下島牛深(北緯32°11')にも棲息する。天草牛深は分布の北限となる地であるが、學者に濫獲された形で可成り減つたのではないかと想はれる。民國では南京、大冶、香港其の他から採集された。江崎博士は杭州に於て浙江省で採れた多數の本種の標品を見られ「支那では揚子江以南の東洋區に廣く分布し、相當普通なものと思はれる」と述べて居られる。

測 定　成雌につき單位粍

體 長	尾狀附屬物長	背甲長	背甲幅	腹部長	腹部幅	大腮長	觸鬚長
45※	30+x(中途にて折損)	17	10	28	13	5	21
40.5※※	約 45	17	9	23.5	12	—	21.5

第1歩脚長	第2歩脚長	第3歩脚長	第4歩脚長
55	31	33	44
46	26	27	36.5

二次性徵　本種は二次性徵顯著で成雄は次の點で成雌と た易く識別される。

※ 奄美大島產　※※ 石垣島產

1) 觸鬚𨍭節は背面よりは前方に疣狀の突起を出し之より後方は小さい4齒狀突起がある(成雌では第2齒最大)。

2) 觸鬚脛節より内方に起生する突起は先端箆形に擴張し齒狀突起がある(成雌では突起は棘狀)。

3) 第2腹節は腹面に於て外緣部を除き栗茶色で僅かに盛り上つた狀を呈し中央に不明瞭な縱溝がある(成雌では此の部分は大體四角形で中央の溝で明かに左右2區に岐たれる)。

備　考　腹端に開口した腺から醋酸臭の强い分泌液を奔出させることは以前から注意されて居る(此の習性は本科のものに共通である)。佐藤博士の觀察に據れば危害の迫りさうな時には尾狀附屬物をピンとさし上け腹部末端の節を上方に上げて多少紫藍色を帶びた透明液を奔出せしめる、其の高さは20糎以上にもなる、此の飛沫を顔に浴びると皮膚がヒリヒリと痛く數分間も續く、眼中には入つたりすると相當の痛さである、液の飛沫は直徑35糎位の範圍には四散するとのことである。臭ひは氷醋酸とそつくりで手袋などに液がかゝると移り香が中々去らない。アルコホル浸漬標品の蓋をとつてみても不快な醋の臭ひを感ずることがある。此の液の射出は例へばフトマルヤスデが液孔から褐色の液を分泌すると同じく、外敵への防禦に役立つものであらう。小動物に對しては觸鬚の鉗も武器として見逃してはならぬかと想ふ。本種の習性に關しては佐藤博士の「サソリモドキの生態」(1941)が最も詳しい。

肛門腺から悪臭ある液を射出することに關しGravely (1915)は印度産の幾種かに就き自他の所見を陳ねて居る。臭ひには强い醋酸様のものから jargonelle (梨の一種で早成種) のエッセンスによく似たものまである〔Uroproctus assamensis (Stoliczka, 1869) が後者の例〕。Wood-Mason はセイロン島に普通の Labochirus proboscideus (Butler, 1872) のそれは梨の非常に濃厚なエッセンスの如き香りと報じ、Gravely はさういふ臭ひは經驗しないと述べて居る。Thelyph-

onus linganus C. L. Koch, 1843 の臭ひを Ridley は墭素瓦斯に比し、且つ體の大きさに較べて斯んなにまで廣く擴散し強力な臭ひを射出し得る動物を自分は他に想起出來ないと讃辭を呈して居る。

脚鬚類は溫帶地方には居ても極めて少い。歐洲や北アフリカには絕對に見られない。Savory の The Arachnida (1935) に完甲族が本州、四國、九州、朝鮮に分布する如く示し却て臺灣に居ないやうになつて居る (66頁の分布圖) のは誤である。Kästner (1932) の分布圖は違であるがそれでも本州、四國にも居るやうに示してあるのは誤である。併し意外なのは Typopeltis amurensis (Tarnani, 1889) といふのが東シベリア (沿海州の Olga 灣と Tachobes 河の間の地帶) から得られたとして記載されて居る。後に廣東、珠江の上流西江 (Sikiang)、安南等が產地として擧げられたが分布に斯樣な隔たりのあることは、兩者が果して同一種であるかどうかを疑はしめる。本種の實相が未だ把握されて居ない證據だと思ふ。♀の鞭狀脚に異狀が無い點も種的標徵の一つとして注目せらるべきであるが、もつと多數個體につき調査されなくては不安がある。Speijer (1936) は此の種を Typopeltis に編入して置くのは不當で氏が 1933 年創設した Minbosius の 1 種とすべきだとして居る。民國からは古く Typopeltis niger (Tarnani, 1894) といふのが記載されて居るが詳しい產地は不明、標品は1♂のみで全貌の明かでない種類であつた。然るに Speijer (1936) は R. Mell が "China" で得た 1 ♂ に就き報告したから矢張り存在に値するものであるが、產地の詳記の無いのはどういふ譯であらう。尙民國では雲南の地から Hypoctonus granosus Pocock, 1900 といふ別屬のサソリモドキが知られて居る。之は♀は分つて居るが♂は未發見のやうである。近年 Speijer (1936) は R. Mell が廣東で採集した♀に基き Typopeltis cantonensis Speijer, 1936 といふ種類を樹てた。同氏は H. Schoede が海南島で採集の♂に據り Teltus vanoorti Speijer, 1936 なる新屬新種をも設けて居る。東洋には居ない Mastigoproctus に近緣のも

のらしい（第1歩脚跗節が8節なのは Teltus 屬の特徴である)。之を要するに民國產の脚鬚目は網羅主義を採れば Typopeltis stimpsonii, T. amurensis, T. niger, T. cantonensis, Hypoctonus granosus, Teltus vanoorti 諸種となる。何れもサソリモドキ科のものであるが、ヤイトムシ科の幾種類かゞ華南方面には必ず居るに相違ない。今日まで一つも見つかつて居ないのが大國支那らしくもある。

本屬は南はシャム、佛印から東シベリア、更に香港、廣東あたりから華中、臺灣、琉球、日本の九州にかけての東亞の特產である。サソリモドキの他に T. amurensis (Tarnani, 1889), T. niger (Tarnani,1894), T. dalyi Pocock, 1900, T. harmandi Kraepelin, 1900, T. kasnakowi Tarnani 1901, T. tarnanii Pocock 1902, T. cantonensis Speijer, 1936 の諸種があるが、♂だけとか♀だけしか知られて居ないものがあり、分類上の位置に關し疑義を存するものもあり、產地の分明を缺く種もあり、威張つて獨り歩きの出來るのはサソリモドキ位のものか知れぬ〔Speijer (1936)は T. harmandi は自己が1934年に創設したGipopeltis といふ屬に移すべきだとして居る。T. kamahoii Mello Leitão, 1931 といふのは T. kasnakowi のシノニムである〕。

ジャワサソリモドキ屬 Thelyphonus Latreille (1802)

屬 徵 　側眼近くから前方に走る顆粒の畝がある。觸鬚の脛節突起は♂♀共同形、前緣鋸齒狀を成す1剛棘として突出して居る。腹部第1腹板は♂では深い中央條溝があり、第2腹板も後緣正中に小棘が認められる。第1步脚跗節の各節は延長する場合と短い場合とあるが♀では屢々著しく變形して居る。中眼は一つの眼圓形隆起により分離される。本屬の分布に關しては Pocock (1900) はセイロン、南印度、ビルマ以東フイリピンまで、ソロモン群島に至る Indo-Malay 及び Austro-Malay 地區とした。種類は多い。屬の模式種は次揭のジャワサソリモドキである。

ジャワサソリモドキ Thelyphonus caudatus (Linnaeus, 1758)

予は森下薫博士がジャワのスラバヤで採集された本種に就き別報文に稍々詳しく記載したから玆には繰返さない。完甲族では最も古く知られた種で即ちリンネが既に其の種名を定めた。ジャワに稀ならず他にボルネオ、ロムボック等にも產する。シンガポール其の他馬來地方に普通なのは Thelyphonus linganus C. L. Koch, 1843 でスマトラ、リンガ Linga (スマトラの屬島) にも分布する最後の腹板に縱の溝のあるのが種的標徵の一つであるが♀では時に不分明のこともある。Tweedie (1942) は例の酸い液はモグラやヂネズミなどよく利く鼻の持主たる小食蟲獸の攻擊を免れるのに役立つだらうとして居る。

ヤイトムシ屬 Schizomus Cook (1899)

脚鬚類の他の代表者にヤイトムシ、サハダムシ等がある。サソリモドキと比較にならぬ程小さいし觸鬚も隨つて細い。背甲は1枚でなく何枚かに割れて居り尾狀附屬物は短くて♀だけ分節して居るが兩性とも疣狀の感がある。酸い液を分泌しない。滅多に人目につかず、たまに見つかつても蜘蛛などと誤認される。人生との交渉は殆ど絕無である。本屬の標徵は既に檢索表に示した。日本では滅多に採集されないから次の屬と共に珍品である。

ヤイトムシ Schizomus sauteri Kraepelin, 1911

臺灣の動物採集家として知られる H. Sauter が臺灣高雄で採集した多數の♂、♀、幼體からドイツの Kraepelin が新種として記載したもので標品はハムブルク博物館に保存される。採集年月日などは報告されて居ない。矢張り Sauter の採集した1♂ 3♀♀の標品はベルリンの動物學博物館にあつて Speijer が調査した。ハムブルクのとどういふ關係になつて居るのか判らない。邦人では加藤正世氏が1926年3月14日臺北州士林郡芝山巖の石下で1頭を採集られたのが最初である。其の後數回通つて綿密に探し更に2頭を獲られた。臺灣產の標品は其の

後誰も得ないから國內に現存のものとしては予が加藤氏から借用した立派な1♀きりであらう。併し同好の士が丹念に探索したら臺灣のあちこちで見つかるものと信ずる。Kraepelin の原記には♂♀共3.3粍內外とあるが予の標品は十分成熟したものと見え5粍を超える。「日本動物圖鑑」改訂版には此の標品に基く全形圖が載ることになつて居る。其の後予は當眞嗣元氏が沖繩本島首里で採集(採集年月日は今では判らなくなつた)し江崎博士に贈られた3♀♀を入手調査するを得て、ヤイトムシは琉球にも擴がつて居るものと考へた。♂を未だ見られないのは殘念である。

本屬のものは東アフリカ、セーシェル群島、印度、セイロン、ビルマ、臺灣、琉球、北米テクサス、メキシコ、西印度諸島、中米ユカタン、南米等熱帶、亞熱帶地方に分布は汎い。小さいから蜘蛛などの如く他物に附着して溫帶の文明國に紛れ込む機會を時に作るものらしい。Simon はセイロン島產の Schizomus crassicaudatus(Cambridge,1872)の生きたのをパリーの博物館で見つけたといふ。又次出の Trithyreus bagnallii Jackson, 1908 はロンドンの Kew 植物園で獲られた幾頭かの♀に就き記載されたものであるが、それは恐らく何地からか移齎されたと考ふべきで自然の分布を示すのではないであらう。

サハダムシ屬 Trithyreus Kraepelin (1899)

前屬によく似たもので「背甲は5裂」と云へば簡單明瞭であるが此の標徵は實は餘り良い手懸りではないのである。本屬はアフリカ、印度、セイロン、ビルマ、シャム、シンガポール、比律賓、小笠原、ニューギニア、ニューブリテン等に分布し、北米加州から1種記載されて居るのは異例である。日本では1929年澤田秀三郎氏が小笠原に採集旅行をして同地產の蜘蛛類標品を岸田久吉氏に贈られたところ、其の中に此の屬に隸するものあるを岸田氏が見出されたのが最初である。氏は和名も學名も採集者に因みサハダムシ Trithyreus sawadai と定められ holotype (♀) の全形圖を示された (Lansania, Tokyo, vol. ii, no. 12, p.

19 1930) が其の後正式の記載を公にせられない。爾來今日まで此の1頭以外に採集した人は無いので、予は實物を檢する機會を持たず種的標徴や體長なども知り得ないで居る。

カニムシモドキ屬 Charon Karsch (1879)

屬　徴　サソリモドキやヤイトムシとは全く形貌を異にするものである。屬徴としては觸鬚の指の分節しない點を重視すべきである。

カニムシモドキ Charon grayi (Gervais, 1844)

大種主義を信奉する予はカニムシモドキ屬には本種のみしか無いものと看做す。仍つて屬徴は其の儘本種の標徴ともなり得る。予は江崎博士が本種內南洋に産すと報ぜられた記事 (1936) を覽て甫めて此の奇怪な蛛形類に注意するやうになつた。氏はパラオ群島ペリリュー島からの1♂1♀1幼體を入手されたのであるが、ミクロシネアから同時に當時の日本から無鞭蠍目が學界に報ぜられた嚆矢となつた。爾來パラオ群島から時々獲られ予の知る限りに於て次の11例を算へるが、パラオでも普通のものでないことは確かである。又ミクロネシアではパラオ群島にのみ見られ同群島のニューギニア或はフィリピンへの動物地理學的近親を示す證左の一つになると想ふ。

	性別	採集年月日	採集地	採集者	標品所藏者	報告者
1	♂		ペリリュー島	長連政(提供)	江崎悌三	江崎(1936)
2	♀		〃	〃	〃	〃
3	幼	6. Ⅲ. 1936	〃	江崎悌三	〃	〃
4	幼	10. Ⅰ. 1938	パラオ本島	〃	〃	高島(1941)
5		Ⅰ. 1929	パラオ群島	祝亥子之助	岸田久吉	〃
6		Ⅸ. 1940	コロール島	岡部正義	〃	〃
7	幼	Ⅸ. 1940	〃	〃	高島春雄	〃
8	♂	5. Ⅰ. 1941	〃	關口晃一	〃	〃

9	♀	〃	〃	〃	〃	〃
10	幼	〃	〃	〃	〃	〃
11			パラオ群島	岡部正義	岸田久吉	〃

上表から判るのは岸田氏が既に1929年にパラオ産の標品を入手して居られたことである

偶然のことがあるもので同じ1936年鹿野忠雄博士は臺灣紅頭嶼の鐘乳洞にてカニムシモドキを獲たることを翌1937年特報された。此のことは氏の手柄である。氏の御報知によれば昭和8年7月を手始めに昭和10年7月、昭和12年7月の3回に亙り十數頭を獲られたといふ。予は其の内の4頭を拜受して居る（内1頭は乾燥標品になつて居て今は可成り損傷した)。現在保存される紅頭嶼産のカニムシモドキは之等の4頭きりではないかと想ふ。乾燥標品のは成雄、他のは液浸で一つには cave 19.IV のラベルがは入つて居り未成熟の♀と考へられる。今一つは成體の♂と未熟の♀と考へられるものでラベルは見つからない。

色 彩　乾燥標品での觀察では背面暗褐色で背甲は黑味が强い。步脚は第2乃至第4のもの黑褐色帶と淡褐色帶と交互に並び縞を成す。腹面は赤黑色、步脚は背面と同色。

測 定　單位粍

性	體長	背甲長	背甲幅	腹部長	腹部幅	觸鬚腿節長	觸鬚脛節長	第2步脚腿節長	產地	計測者
♂	20.5	7	11	11	7	14.5	15	12	パラオ	江崎氏
♀	23	7	10.5	12	7.5	11.5	12	11.5	〃	〃
♂	27	10	15.5	17	12	26.5	28.5	22.5	ミンダナオ	高島
♀	30	9.5	15	20.5	11	22.5	25	21.5	〃	〃
♂	28.5	10	16.5	18.5	14	22.5	25	20	ジャワ	〃
♀	25.5+x	8.5	13	17+x	13.5	17.5	19.5	17	〃	〃

こゝに用ひたのは何れも成熟せる個體のみである。ミンダナオのは鹿野博士が比島人から貰ひ受けたものである。ジャワ產の♀は腹部が彎曲した姿勢になつて

居るので腹部長も體長も出て來た數値は實長でなく、それに＋xであらねばならぬ。序に記す。比律賓ミンダナオ島産のカニムシモドキ1♂2♀♀を鹿野氏から拜受した。其の内1♂1♀は上表の示す如く老熟した立派なもので標品瓶の底に徑3粍の卵19箇があつた。其の大きさから按じて上表中の♀の抱いて居たもので、卵嚢は破れたのか見當らず、嚢中の卵の一部のみ瓶の底に保存されたものであらう。之だけの大きさの♀で全卵數19箇とは考へられぬ所である。今1頭の♀は前の2頭より小さく（體長14粍）淡色であるが♀としての二次性徴は顯著である。

二次性徴　1）♂では觸鬚腿節長(或は脛節長)＞第2乃至第4步脚腿節長、♀では觸鬚腿節長≒第2乃至第4步脚腿節長　が便利な手懸りである。2）♀は體長♂に勝る。これは♀の腹部長が♂のそれを凌ぐからである。併し背甲幅は♂のはうが稍々勝れて居ることを直感し得る。3）腹部第2腹板の形狀にも差がある。♀では上緣は內方に殆ど彎曲しない、正中に近い2縱溝は明かであるが♂程深刻でない、下緣の側方(左右)は弧狀に抉られる、下緣中央部の缺刻は認められぬ程。然らざるものが♂である。

分布　國外では比島に普通である（本種の基産地は比島マニラ)。馬來半島には稀である。ジャワ、アムボイナ、ニューギニア、ビスマルク群島、ソロモン群島など分布は汎い。姿は奇怪であるが全く無害で人生との交涉は絕無と稱すべきである。

本種以外にも南方諸地域には諸種のウデムシを產するが本種で代表させて十分である。

Ⅱ　臺灣紅頭嶼産全蝎目及脚鬚目

臺灣產の脚鬚目としては上記く如くサソリモドキ、ヤイトムシを擧げられる。動物地理學上特殊の性格を持つ紅頭嶼*にはサソリやサソリモドキではどん

な種類が見られるか。

此處に產するサソリにはヤヘヤマサソリがあり脚鬚類にはサソリモドキとカニムシモドキが知られる。サソリは更に種類をふやすことは不可能であらうが脚鬚類のはうはヤイトムシ科のものが將來見つかるかも知れない。併し其の仲間を採集するのは幸運に惠まれなくてはならない。予自身紅頭嶼產標品を檢し得たのは鹿野氏が洞窟內で得たカニムシモドキ1♂のみである。此のものは曾て寫眞を以て示した (1941)。3種の地理的分布を考察してみるとヤヘヤマサソリは東洋、濠洲兩區に跨がり分布は弘い、サソリモドキは東洋區系であつて多少は舊北區に進出しカニムシモドキが比律賓系若しくは濠洲系の顯著な例として鹿野氏の所論を强化するのである。

去る昭和18年12月初旬鹿野氏の格別の御厚意により氏が紅頭嶼で苦心採集された標品其の他大小7瓶を受領することが出來た。之により同島產サソリ及びサソリモドキ類は全部自身で標品を檢したことになる。貴重な標品を擧げて予に提供された鹿野博士に深謝の意を表明する。

1 Liocheles australasiae (Fabricius, 1775) ヤヘヤマサソリ

何れも3糎未滿の小さなもの。15頭の內1頭局部損傷じて居るが全部♀だと思ふ。

2 Typopeltis stimpsonii (Wood, 1862) サソリモドキ

老熟するには到らない3♀♀。

3 Charon grayi (Gervais, 1844) カニムシモドキ

1♂2♀♀。旣に述べた。

III 脚 鬚 目 の 分 布

* 紅頭嶼動物相の特異性に關しては例へば鹿野博士の「紅頭嶼生物地理と新ワーレス線北端の改訂」(大南洋文化と農業 1941)を參照せられるが宜い。

脚鬚目はアジア、アメリカ、アフリカの熱帶、亞熱帶地方及び濠洲本土近くの諸島嶼に棲息しヨーロッパ及び濠洲には居ないのである。種類に富む地域は印度馬來地方と中米から南米の北部にかけてゞ本目發祥の二中心たるを想はせる。脚鬚類の本場である。アジアでは印度馬來地區を主産地とするが餘勢は東してニューギニア、ソロモン群島、サモアにまで及ぶ。Typopeltis .amurensis が舊北區のアムールランドに産するのは寧ろ奇である。アフリカではサハラ沙漠以南に見られる。アラビア南部の一部分から大陸の東部海岸地方、セイシェル、マダガスカル、間が飛んで西南部海岸地方などに浸潤するがアジアに較べれば大分劣勢になつて居る。アメリカでは Texas や California からブラジルにかけて豊富で離島では Trinidad 島や Galapagos 諸島に見られる (Montevideo や Patagonia で採取例があるがそれは移入されたものと考へられて居る)。注目すべきは本目中最大の種 Mastigoproctus giganteus (Lucas, 1835) が北米南部からメキシコにかけ分布することで(體長だけで75粍になる)*ウデムシ科のTarantulinaeものは此の地域の特産であつたが1種 Tarantula marginemaculata (C. L. Koch, 1841) は知らぬ間に移されて西部アフリカには入つた。但し今では Tarantulinaeはアジアでも見つかつて新大陸特産とは云へなくなつた。即ち Speijer (1936) は Tarantula palmata (Herbst, 1879) のマニラ産の標品につき報じて居るのである。本目のものもサソリの或る種の如く船舶其の他により相當大旅行するから猥りに新産地と斷定するのは危険でる。微小なヤイトムシ科のものが溫帶地方で見つかつた場合は始めから疑心暗鬼の態度をとるのが安全であらうと思ふ。

垂直分布に關しては特に論ずる程のことは無い。高地にも低地にも居る。サソリモドキ科の Uroproctus assamensis (Stoliczka, 1869) がヒマラヤのダージリング附近で1200米の高地で採集されたのが高い方の例になつて居る。

---

* Kästner (1932) は本目最小のものとして Schizomus perplexus Gravely, 1915 (體長3mm) を擧げた。此の種は *Trithyreus perplexus* とすべきもので セイロン島産であるが同じ屬の別種に同大のものがある。サソリの場合と違つて最小爭ひの判定はた易くないことである。